

# Alphons Mucha Museum News

堺市立文化館 アルフォンス・ミュシャ館



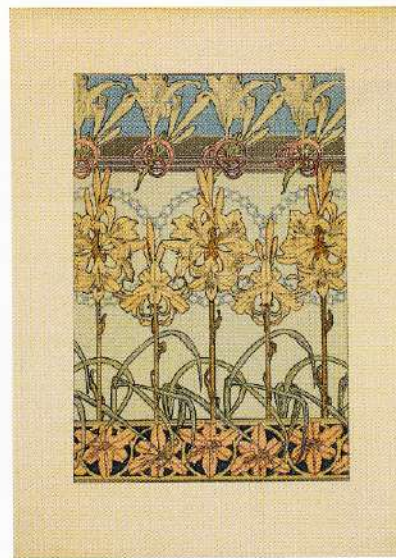
アルフォンス・ミュシャ  
サラ・ベルナル  
1896年  
リトグラフ、紙

## Contents

## vol. 2

展示報告 (2012年3月 - 2013年3月)  
作品紹介  
イベントレポート  
作品修復報告  
学芸員コラム vol.2  
ミュシャ館インフォメーション





## デザイナーとしてのミュシャ

2012年3月17日(土)ー7月8日(日)

**憧**れていた仕事や目指した職業はありますか?本展では、画家を目指していたミュシャがデザイナーとして評価された時、夢と現実とどのように折り合いをつけ作品を制作していたのか、そのスタンスに注目し81点の作品を展覧しました。

1877年、教会の天井画に感銘を受けた17歳のミュシャは画家になろうと決めます。彼が目指したのは古典的主題を扱う画家でした。17世紀以来、ヨーロッパの絵画には、宗教や神話といった高尚で伝統的な歴史画を最も高貴とする、「ジャンルのヒエラルキー」という考えがありました。青年ミュシャが志したのはこの頂点に位置する歴史画で、30歳頃まではアカデミック美術の大家ハンス・マカルト(1840-84)の影響を受けていたと指摘されています。向学心に燃えバリエに出たミュシャは、アカデミー・ジュリアンとアカデミー・コラロッシで学びました。いずれの学校も名画模写や人体デッサン、陰影表現、物語画の構成研究に重きを置く伝統的なカリキュラムを組んでおり、彼はここで堅実な画技を身に付けます。この頃、学友との交流のなかで最新の芸術動向を知り、ウィリアム・モリス(1834-96)ら世紀末芸術の旗手の著作を初めて読んだとされます。1890年、経済的事情からアカデミーを辞めざるを得なくなると、それまで培った力量を発揮し挿絵画家として糊口を凌ぎました。

本展では1895年に制作された《ジスモンダ》を、裝飾芸術家、つまりデザイナーとしてミュシャが注目を集める契機となった記念碑的作品と捉え、出品作品を《ジスモンダ》以前と以後に分けました。「ドイツ史の諸場面とエピソード」の挿絵など、《ジスモンダ》以前の画風はまだアカデミックで、その後頭角を現すことになる「下位」の商業デザインとは一線を画すものであったことが分かります。《ジスモンダ》以降に顕著となる、いわゆる「ミュシャ・スタイル」がアール・ヌーヴォーの指針として高く評価されると、挿絵においても裝飾と構成の面白さを重視し始めており、展示では『トリボリの姫君イルゼ』を、挿絵にアール・ヌーヴォー

の裝飾表現を取り入れた実験的な例として取り上げました。

新たな領域へと踏み出したミュシャでしたが、それまでの伝統的な表現を捨ててはいませんでした。彼は心霊実験に参加し非日常下にある人間の動きを観察することで紋切型の人物描写から脱しようとしながらも、伝統的なポーズや構図の安定性を理解していたため、同じ構図を繰り返して用いています。画家として生きることを決めてからはデザインの仕事と距離を置きますが、1900年前後はまだ画家とデザイナーを両立しようとしていたようです。キリスト教の祈禱文を裝飾ページと象徴的な絵画ページで表した『主の祈り』は、その好例といえるかもしれません。職業デザイナーとしてのミュシャは、注文主の求めと世の関心に応えるため、流通していた資料を用いデザインのイロハを独学で学んだようです。「ミュシャ・スタイル」の集大成である図案集『裝飾資料集』は、その内容が一部、1856年以降イギリスの公立デザイン学校で使用されていた教本に類似している他、前出『トリボリの姫君イルゼ』の制作にあたっては、ミュシャと同時代に活躍した裝飾芸術家の図案集を参照していたことが分かっています。終生、彼の心は画家であり続けたようですが、仕事のため新たな芸術を習得する努力は惜しみませんでした。「芸術のための芸術と、産業の売り込み用の芸術とを区別すべきだ。後者は前者に含まれるとしても、決して前者の方は後者に侵害されるべきものではない。」伝統と革新の間で揺れたミュシャはこのような結論に至り、アカデミーで学んだ「前者」を「後者」に活かし、1908年、48歳で歴史画家となることを誓うまでは、アール・ヌーヴォーの frontline デザイナーとして仕事を続けたのでした。(S.S.)

## ミュシャ館の質問箱

2012年7月14日(土)ー11月11日(日)

**当**館では、年3回の企画展を通じ様々なご質問をいただきます。こちらにまとめてお答えすることで、初めてミュシャを知った方には、作品に親しむ第一歩に、すでにご存じの方には、より深く知り、新たな魅力を見つけていただける機会となればと考えました。開催にあたりアンケートに寄せられた過去2年分のご意見、ご感想を整理するとともに、8カ月前より館内とHP上に「質問箱」を設け、140件を超えるご質問をいただきました。集計後、多かった項目を抽出し、「誰?」「何?」「どうやって?」といった素朴な視点を切り口に72点の作品を出品しました。展示したQ&Aの早見版を掲載し、ご報告に代えさせていただきます。

**Q.1** どこで生まれたの?どこの国の人?

**A** 1860年7月24日、オーストリア=ハンガリー帝国支配下にあった、モラヴィア地方(現在のチェコ共和国東部)生まれ。チェコ人です。

**Q.2** ミュシャの人生の転機はどんな風に訪れたの?

**A** 1895年、挿絵画家として生活していた35歳の時、大女優リラ・ヘルナル(1844-1923)のために演劇ポスター《ジスモンダ》を制作したことが転機でした。本作はパリでセンセーションを巻き起こし一躍時の人となりました。

**Q.3** どんな作品を作ったの?

**A** デザイナーとしてポスター、舞台美術、室内裝飾、宝飾品デザイン、商品パッケージ。画家として挿絵、肖像画、宗教画、歴史画、切手や紙幣のデザイン。パリではデザイナーとして働き、祖国では画家の仕事に重きをおきました。

**Q.4** ミュシャのポスターはどんな場所にあったの?

**A** 街角の壁面や有料広告塔などに貼られていました。人気のあまり盗難に遭うこともあったようです。

**Q.5** ミュシャと同じ時期に活躍していた芸術家は?

**A** 同じポスターデザインの分野では、シェレやグラッセ、ロートレックが挙げられます。また、ボナールやドニ、ピサスリー、ムンク、クリムトと同世代で、ロダンやゴッホも存命でした。

**Q.6** なぜ植物をたくさん描いているの?

**A** 植物の曲線を取り入れたアール・ヌーヴォーという芸術様式が流行していたためです。この流行を作品に取り入れられたり、祖国の民族裝飾として描いた例もあります。

**Q.7** どれだけの下書きや練習をしたの?

**A** 正確な数は分かっていませんが、人物だけをデッサンした後、改めて数点の習作(デッサンを含む練習や試作)を描き、下絵(本番前の下書き)を描いたようです。習作や下絵が複数枚確認されている作品もあります。

**Q.8** ひとつの作品にどのくらい時間がかかったの?

**A** ポスターは極めて短期間で仕上げたようです。明確な日数は分





©中村年子

かりませんが、受注から長くて半年以内と考えられます。壁画や油彩画は年単位で制作しました。

Q.9 《蛇のプレスレットと指輪》の構造は？

A 胴は頭部を含む4つのパーツから成り、細かなパーツを繋げた尾は可動します。腕輪は2つの半円を蝶番で繋いでおり、装着するときは反対側の出っ張りを押し開きます。裏に制作者フーケの名が刻印されています。

Q.10 絵のモデルは誰？

A モデルが明確な例として、顧客であったサラ・ベルナルや恋人、家族が挙げられます。よくポーズモデルも雇いました。

Q.11 なぜサラの絵が多いの？

A 6年間、専属契約を結んでいたためです。「サラの絵が多い」と感じられるのは、それらが代表的作品として挙げられることが多いからでしょう。約115点あるポスターのうちサラを描いたものは9点しかありません。

Q.12 どんな芸術家と交流があったの？

A 画家クパカやゴーガン、ロダンに特に親交が深かったようです。美術学校で同窓だったボナルやドニラナビ派との交流もありました。

Q.13 ミュシャが影響を受けた画家は？

A 19世紀オーストリアを代表する歴史画家ハンス・マカルトからの影響が指摘されています。アカデミックで耽美的な作風に惹かれたようです。

Q.14 ミュシャが与えた影響は？

A いわゆる「ミュシャ・スタイル」といわれる優美な作風はアール・ヌーヴォーのアイコンとしてヨーロッパやアメリカを席卷しました。日本でもほぼ同時期に真似て描かれた挿絵が『明星』に掲載されています。

Q.15 信仰していた宗教は何？

A キリスト教。カトリック教会の敬虔な信徒でしたが、その信仰は土着の神々や霊的なものへの関心、フリーメーソンの思想と複雑に交じり合っていました。

Q.16 …稼ぎはいくら？

A 絶頂期には現在の貨幣価値にして約3,500万円もの月取があったようですが、その分、馬車馬のように働いたそうです。晩年は祖国ため無償で仕事をしました。

Q.17 晩年は何をしていたの？

A 独立に沸く祖国チェコスロヴァキア共和国に、芸術的に貢献しようと活動の拠点をチェコへ移し、民族の苦難と栄光の歴史を描くことをライフワークとします。この《スラヴ叙事詩》は未完成に終わりました。

Q.18 ハーモニーの背後の人は神様？

A 神ではなく、2つの異なるものをひとつにする「調和=ハーモニー」の寓意像と考えられます。(S.S.)

## ミュシャを愛した日本人

2012年11月17日(土)ー2013年3月10日(日)

ミュシャのポスター作品は、ほぼリアルタイムで明治期の日本に紹介され、以来今日まで多くの人に愛好されてきました。日本人とミュシャ作品の出会い、すなわちアール・ヌーヴォーとの出会いであり、その衝撃は黎明期にあった近代美術に広く影響します。本展は、日本で初めてミュシャの作品が公に展示されたのはいつなのか、どのように日本で受容されたのかを追うことで、ミュシャと日本人、ならびに堺市出身の歌人と謝野晶子(1878-1942)との関係を紐解き、前後期合わせて97点の作品と資料を展示しました。

第1章「1900年、パリの衝撃」では、1900年の第5回パリ万国博覧会で日本人が味わった「敗北」と、目の当たりにした大衆文化、芸術の動向に注目しました。幕末以来、欧米へ工芸品を輸出し、その精密さで定評を得ていた日本はこの万博にも自信を持って美術工芸品を出品しました。しかし、江戸期の浮世絵や陶磁器といった古美術が「ジャポニスム」ブームのなか高く評価された一方で、同時代の日本画、洋画への評価は奮わず、黒田清輝(1866-1924)の《智・感・情》と他1点が銀賞を受賞するにとどまりました。この「敗北」により、日本の近代美術はヨーロッパの洗礼を受け、自らを客観視する機会を得たのです。日本の芸術家たちは、新たな道を模索すべくパリから資料を持ち帰り、ここにミュシャのポスターや、それらが掲載された雑誌が含まれていたと考えられます。

第2章「白馬会とアール・ヌーヴォーのポスター」では、ミュシャの作品が日本で初めて展示された状況について、可能性に言及しながら紹介しました。明治中期であった1896年、洋画家 黒田清輝を中心に美術団体「白馬会」が設立されました。同会は、開放的な性格と新しい外光表現から新派と呼ばれ、それ以降主流派となる洋画を育て発展さ

せます。主な活動目的を展覧会と定めていた彼らは、油彩画のみならず版画も展示し、注目すべきことに、1900年の第5回展から1902年の第7回展まで、アール・ヌーヴォーのポスターを出品しています。これは西洋の新版画リトグラフと、流行の新様式アール・ヌーヴォーへの関心によるものと考えられますが、同時に、機械刷りの版画を単なる印刷物ではなく芸術と捉え、新たな表現を求めた近代版画の出現に歩みを同じくします。

日本で初めてミュシャの作品が展示されたのは、まさにこの第5回会展であったとされ、所有者や日本に渡った経緯は不明なものの、会場写真には《トスカ》が写っています。文芸誌『明星』第8号誌掲載の、上田敏と謝野鉄幹「白馬会画評」によれば、この時、ミュシャの作品は、他に《トラピスティーヌ》といずれかのジャンパンのポスターが出品されていた可能性が指摘できますが、出品目録には掲載されておらず、その全体像は未だ明らかにされていません。翌年の第6回展には、白馬会展史上、最も多くのアール・ヌーヴォーのポスターが出品されました。目録によればその数48点。黒田が資料や土産として持ち帰ったものが大半を占めたようです。そのうち、「ムシヤ」の作品は「シヨブ、巻煙草紙」や「サロン、デ、サン展覧会」など6点が数えられますが、いずれも制作年違いで作品が2点ずつあるため、具体的にどちらの作品を指すのかは不明瞭で、また明らかにミュシャではないと分かる作品も含まれています。

第3章「日本での展開」は、アール・ヌーヴォーの動向を、日本では誰がどのように受け止めたのか、「明星」などの雑誌や書籍の装丁を例にご覧いただきました。渡仏した芸術家たちにとって、現地で最新の美術動向を直接体験したことは、各自のその後の活動の方向付けに少な



©中村年子

アルフォンス・ミュシャ  
サロン・デ・サン  
ミュシャ作品展  
1897年  
リトグラフ、紙



からめ影響を与えました。パリのアトリエにミュシャ《ジョブ (1898年)》を飾っていた浅井忠は、パリ万博視察を機に工芸のための図案に興味を抱くようになり、帰国後は図案の研究と実践の道を歩むこととなります。しかし、アール・ヌーヴォーをより感受性豊かに受け止めたのは、むしろそれを現地で経験していない人々の方だったのかもしれない。藤島武二 (1867-1943) や杉浦非水 (1876-1965)、橋口五葉 (1881-1921) は、パリ万博を訪れてはいませんが、海外よりもたらされたポスターや雑誌から間接的に動向を受け止め、そのイメージをそれぞれ自由に解釈し想像をふくらませ、自身の作品に取り入れました。与謝野晶子が活躍した『明星』には、一条成美 (1877-1910) の手によるとされる、ミュシャの《サロン・デ・サン：ミュシャ作品展》と《サラ・ベルナル》を真似た挿絵が掲載されていますが、すでにその本来の意味を越え、ここでは明治浪漫主義文学と奇妙なコラボレーションを果たしています。

最後となる第4章「ミュシャを愛したコレクター 土居君雄氏」では、第一次世界大戦を境に日本人の心がアール・ヌーヴォーから離れたのち、再び一般大衆の目に触れるようになるまでを紹介しました。日本初となるミュシャ回顧展が開催され、にわかミュシャ・ブームが起こったのは1978年のことでした。この展示はミュシャの息子イジー (1915-1990) の協力によるもので、60年代からミュシャ作品を収集していた土居君雄氏 (1926-1990) は、これを機にイジーと親交を結びます。「ミュシャの画業を広く顕彰したい」と願う2人は公私にわたり支え合い、83年から約10年間、日本各地でミュシャ展を開催しました。今日、広くミュシャの名と作品が知られているのは、彼らの尽力によるところが大きいと言えるでしょう。土居氏は作品を広く公開し、再び「ミュシャを愛する日本人」の種を播いたのです。(s.s.)

作品介绍

堺市では約460点のミュシャ作品を所蔵しています。企画展で展示された作品や人気作品などをピックアップしてご紹介しています。

サラ・ベルナル

1896年 リトグラフ、紙 753×556mm

サラ・ベルナルは「聖なる怪物」と讃えられた女優で、ロマン派演劇の最後のミューズとしてフランス演劇界に名をとどめている。人生の転機となった《ジスモンダ》以来6年間の契約を結んだ彼女は、ミュシャにとって大きな後ろ盾であった。

1896年11月9日、サラの賛美者と友人によって彼女の52歳の誕生日を祝う晩餐会「サラ・ベルナルの日」が開かれ、各界の名士500名が出席した。サラが大理石の階段を下りて登場すると一同は熱烈的拍手で迎え、詩人は彼女を女神のごとく讃える詩を朗読し、オーケストラが賛歌を演奏したという。本作は芸術雑誌『ラ・プリュム』の芸術出版部が販売したポスターだが、もとは、この晩餐会に合わせサラについての記事が本誌に掲載されることを告知するために制作され、左下に雑誌名と発売日、サラの名が入っていた。記事のタイトルが彼女のヒット作と同名の「遠国の姫君」であったため、ミュシャは、この演劇のヒロイン メリザンドに扮したサラの姿を描いた。ユリの付いた冠もまたミュシャがデザインしたもので、実際に使用された小道具であった。

本作はまた、ミュシャの作品が遠く日本にまで影響を及ぼしていたことを示す重要な作品でもある。1900年に創刊された日本の文芸誌『明星』には、しばしば背後の輪に描かれた「SARA BERNHARDT」の文字を「MIYOJO」に変えたモノクロの挿絵が登場する。これは一条成美の手によるものとされ、恐らくは現物のポスターを模写したのではなく、雑誌などに挿絵として掲載された縮刷版を写したものと考えられる。(s.s.)



ビスケット・ラベル：  
ルフェーヴル＝ユティル

1900年 リトグラフ、紙 311×227 mm

ルフェーヴル＝ユティルはフランス西部の都市ナント創業の製菓会社で、現在もビスケットのブランドとして存続している。1896年以降、ミュシャは同社のために多数のデザインを行っており、2点のポスターと1点のカレンダー、少なくとも14点以上のパッケージデザインが確認されている。同社は商品広告におけるイメージ戦略を重視しており、ミュシャを始めとする流行の作家にポスターを依頼していた。また、商品が上流階級の紳士淑女に供されるべきものであることを示すため、パッケージには着飾った男女を描かせることが多く、ミュシャもこれを踏襲している。同社のパッケージには今も「LU」のロゴが印刷されているが、これを最初に使用したのはミュシャであったとされる。

本作はコレクター向けに再印刷されたものと考えられ、側面2面は印刷されていない。(s.s.)



©中村年孝

第8回ソコル祭

1925年 リトグラフ、紙 1223×822 mm

「ソコル祭」とは、1892年にブラハで発足した体操団体ソコルが4年に1度開催した競技会であり総合芸術の祭典。当初は心身の鍛錬を目的としていたが、次第にスラヴ主義と一体となり、ハプスブルク帝国の支配下にあったスラヴの人々に、スポーツを通して愛国心と民族の団結を喚起する役割を担うようになった。参加者は数万人に上り、体操のマスゲームのほか演劇なども行われた。ミュシャは幼い頃から同団体に所属し、「民族への愛と、祖国のために流された血で真っ赤に輝く」衣装に憧れを抱き、愛国心を育んだ。第8回ソコル祭において、彼は大規模な野外演劇をプロデュースした。ブルタヴァ川 (モルダウ川) に、かがり火をともした60隻の船を浮かべ、数百人のキャストを使い、民族の歴史を描く壮大な劇が展開されるはずだったが、初日に嵐に遭い、予定されていた4日間の公演は中止されてしまった。この劇の内容は、晩年の大作《スラヴ叙事詩》と大部分が共通していたとされる。ポスターに描かれているハート型の葉は、チェコスロヴァキア共和国の国樹である菩提樹。ソコルの衣装を着た青年は、手に菩提樹の輪と、勝利と栄光のシンボルである月桂樹の輪を持ち、その背後には、彼らを守護するかのようスラヴ民族の擬人化像「スラヴィア」が描かれている。本来このポスターは、絵の下にイベントの告知文と「同志ミュシャ」の名が記載された縦長の作品であったが、堺市所蔵の本作はこの部分を欠損している。(s.s.)





## ミュシャのデザインでカードを作ろう!

2012年8月18日(土) 12:00~17:00、19日(日) 10:00~17:00

今年で4度目の開催となるアート・フェスティバル「SAKAI ART World 2012」(堺市産業振興センター)に場所を設け、ミュシャの作品に描かれた人物や装飾を組み合わせてポストカードを作りました。

あらかじめ、作品からそれぞれのパーツを抜き出したシールシートをご用意したので、参加者は好きなパーツを切り取り、カードの上でコラージュして貼るだけ。元の作品を知っている人も知らない人も、着せ替えごっこのように自由に作品を楽しみました。たくさん

のパーツを重ねて画面を埋めつくす、パーツをさらに分割するなど、企画者の想像を超える組み合わせが次々と飛び出しました。小さなパーツを台紙から剥離するのに苦労された方が多かったようですが、最年少はなんと2歳! 幅広い年齢の方にご参加いただきました。熱中される方が多く、「作業時間お1人様30分」という当初想定は良い意味で裏切られました。



参加者アンケートには、「切っただけで簡単にできておもしろかったです。」「時間を忘れるくらい集中してしまいました。」「こんなふうに参加できるのは、すごく嬉しいです。」「ミュシャの世界のなかに、少しだけ自分も入れたような、そんな楽しいひと時でした。」という感想をいただきました。(SS)



## 講演会 アール・ヌーヴォーと日本

2013年2月16日(土) 14:00~15:30

2013年2月16日(土)、当館2階ギャラリーにて講演会「アール・ヌーヴォーと日本」を開催しました。

講師としてお招きした今井美樹氏は、現在、大阪工業大学 空間デザイン学科で教鞭をとられるかわら、サントリーミュージアム[天保山]にて学芸員として勤務された経験を活かし、「ディック・ブルーナ展」(2003-04年)の企画立案など、展覧会の現場でも活躍されている方です。

今回は、ポスターなどモダン・デザインに通じておられる今井氏に、ミュシャが活躍した時代、ヨーロッパで起こっていたジャポニスムやアール・ヌーヴォーの様相について、同時代の日本の工芸、絵画などにも触れながらお話しいただきました。

講演ではまず、ミュシャが活躍した時代のヨーロッパ、とくにパリの様子が紹介され、当時流行していたアール・ヌーヴォーという様式や、ポスターの流行が紹介されました。

当時のヨーロッパのポスターにおける表現の源泉のひとつ、日本趣味とはどのようなものか。アール・ヌーヴォー期のポスターの数々が日本に入ってきた際、どのように展開したのか。日本の広告媒体の西洋化と、工芸分野における図案の変遷、アール・ヌーヴォーからアール・デコへの変化についてもお話は及びました。(HN)



### 2011年度(後半)

作品名	制作年	技法・材質	修復後寸法(タテ×ヨコ)	処置内容	委託先
1900年/パリ万国博覧会 ポスニア・ヘルツェゴヴィナ館壁画(下絵)	1899- 1900	墨、紙	1380×3125	画面及び裏面の乾式洗浄、裏打ちの除去、裂けの繕い、裏打ち及び作品固定、色調の調整、アクリルパネル新調、既存線縁の改良	山嶺絵画修復工房
1900年/パリ万国博覧会 ポスニア・ヘルツェゴヴィナ館壁画(下絵)	1899- 1900	墨、紙	1346×1978	画面及び裏面の乾式洗浄、裏打ちの除去、裂けの繕い、裏打ち及び作品固定、色調の調整、アクリルパネル新調、既存線縁の改良	山嶺絵画修復工房

### 2012年度

作品名	制作年	技法・材質	修復後寸法(タテ×ヨコ)	処置内容	委託先
ウミロスマラー	1903-04	油彩、カンヴァス	2700×3380	絵具層浮上りの接着、旧パネルの除去、旧修復の補充、バックパネルの新調、画布張り直し、画面洗浄、旧補彩除去、画面艶の調整、損傷部分充填及び補彩、既存線縁の修理、装装	Con Res工房

※作品寸法の単位はmm。



『装飾資料集』の構成と、植物デザインにおける影響関係

『装飾資料集』は全72図からなる図案集、装飾デザインに携わる者、またそれを学ぶ者のための見本帳として出版された。その構成は、図1から2が、心霊研究等から導き出された人体のポーズと、女性の素描。図23から48が、植物の精確な素描と様式化された植物模様。またそれらの装飾への応用例。図49から72が、人体のポーズと模様を組み合わせて創り出した宝飾品やカトラリー、室内装飾用オブジェのデザインである。掲載された図は平面から立体まで多岐に渡り、幅広い分野でマルチに活躍したミュシャの「決定版」と言ふべき一冊となっている。

本書は、1900年の第5回パリ万国博覧会出品のために描いた作品を収録したもので、展示から2年後に出版され、欧米の学校や図書館に広く販売されたという。

19世紀末のフランスで図案集を出版したのはミュシャだけではなかった。同時代を代表するものとして、1896年にウジェーヌ・グラッセが出版した『植物とその装飾的応用』が挙げられる。そもそもこうした手引書の先駆けとなったのは、イギリスの芸術家オーウェン・ジョーンズの『装飾文様集成』『装飾の文法』(1898年)である。イギリスではフランス



アルフォンス・ミュシャ  
『装飾資料集』図26(上)  
『装飾資料集』図38(下)  
1902年  
リトグラフ、紙(書籍)

のアル・ヌーヴォーに先行してアーツ・アンド・クラフツという芸術改革運動が起こり、伝統的な芸術家とは別に職業デザイナーを養成しようという気運が高まった。1837年イギリス初の公立デザイン学校が設立され、ここで教本に採用されたのが本書である。これは単なる図案集ではなく、収録した各地の装飾から文明史を見るところという歴史書としての側面もあった。独学でデザインのノウハウを習得したミュシャが、こうした既存の図案を参照していたことは確かであり、当時流通していた複数の図案集を所有していた可能性は高い。事実、『トリポリの姫君イルゼ』の60ページ及び87ページは、フランスの装飾芸術家モリス・ピラール・ウェルヌイユ(1839-1925)の図案を引用しており、『装飾資料集』図60に描かれたクワガタの帯状装飾はジョーンズの弟子クリストファー・ドレッサー(1834-1885)が陶磁器メーカー、ミントン社のために描いたものと酷似している。

ミュシャがアーツ・アンド・クラフツの著作を読み、それぞれの概念を独学で吸収していたことは、その発言から窺える。平坦な表面は平坦なモチーフで飾るべきであり、絵の後ろに別の次元があるように見せる効果はあってはならない。という考えは、オーガスタス・ピーユジン(1812-52)以降、ウィリアム・モリス(1834-1896)が強く唱えたものである。一方で、植物を様式化したデザイン案を見ると、植物の構造をデザイン優位に改変していることが分かる。これはモリスの考えに反するもので、むしろ、必ずしもその形態を模倣してはいないという点で、ドレッサーらデザイン学校の方法に近いように見える。ただしミュシャの場合、彼らのように、装飾によって何らかの普遍的理念を表現するという明確な目的はなく、理論化された装飾というよりは、『デザインのためのデザイン』と割り切ったものであったように思われる。もちろんミュシャのデザインの全てが模倣や引用というわけではない。アル・ヌーヴォーには有機的な曲線の特徴とし、一般的にその源泉は植物であるとされるが、ミュシャは、心霊実験で撮影した「エ(オド)」(自然界に存在するとされていたエネルギー。異常現象に関係すると考えられていた)の軌跡を作品に装飾的曲線として取り入れるなどユニークな試みを行っている。既存の装飾理念や図案を取り入れながらも、『装飾資料集』という、より自由で感覚的、実用的な見本帳を提案できた裏には、ミュシャの「あこがれ」があり、デザインの現場で使い勝手のよいものを抽出することができる、たまたき上げの経験が大きな役割を果たしていたように思われる。(S.S.)

ミュシャ館インフォメーション

『KATAGAMI Style』展

2012年4月の東京、三菱一号館美術館での開会を皮切りに京都、三重を巡回した『KATAGAMI Style』展が同年10月14日に終了しました。本展では、19世紀後半に日本よりもたらされた型紙が、欧米の造形芸術に及ぼした影響について圧倒的な作品数で紹介されました。堺市からは、『ジョブ(1896年)』『サラ・ベルナール』『ブルネット：ビザンティン風の頭部』『プロント：ビザンティン風の頭部』『夢想』の計5点の作品を出品し、アル・ヌーヴォーデザインの一端をお見せしました。(S.S.)

ご存知でしたか? 粗品リニューアル

館内アンケートにて広報物の送付を希望された方に、次回以降の展示案内をお送りしています。その際、企画展会期中有効の「粗品交換券」を同封し、次回ご来館時にご提示いただいた方には、ささやかながら粗品として絵ハガキをプレゼントしてきました。実はこの粗品、2012年度よりリニューアルしております。半透明のプラスチック製の葉で、『装飾資料集』『装飾人物集』をもとに学芸員がデザインしました。全6種類あります。どれが当たるかは、お楽しみに!(S.S.)



堺市立文化館 アルフォンス・ミュシャ館

観覧料	一般 500円	高校・大学生 300円	小・中学生 100円
開館時間	9時30分-17時15分(入館は16時30分まで)		
休館日	月曜日(休日の場合は開館)、休日の翌日(翌日が土・日・休日の場合は開館)年末年始、展示替期間		
交通	JR阪和線「堺市」駅下車徒歩約3分 JR快速にて大阪から約35分・天王寺から約8分・和歌山から約50分・関西国際空港から約45分		

590-0014 大阪府堺市堺区田出井町1-2-200 ベルマーージュ堺式番館  
TEL:072-222-5533 FAX:072-222-6833  
http://mucha.sakai-bunshin.com/

